

伊藤嘉彦先生のご逝去を悼んで

京都大学大学院工学研究科
合成・生物化学専攻 杉野目道紀

伊藤嘉彦先生は昨年12月23日ご自宅にて、急性心不全により早すぎる生涯を閉じられました。ちょうどその1週間前の12月16日、先生の満69歳の誕生日に、100名を越える同窓生の参加のもと古希をお祝いする会をもったところでした。「あと数年のうちになんとかもう一仕事を」という先生の力強い言葉に、同窓生一同改めて先生の研究者魂を強く感じとったその矢先の出来事でした。筆者は学生の頃から伊藤先生に最も長くお世話になった門下生の一人です。この場をお借りして、筆者の個人的な視点も含めた伊藤先生の思い出を述べさせて頂きたく存じます。

伊藤先生は大阪にお生まれになり、昭和36年京都大学工学部を卒業、同41年に博士課程を修了し、同年助手に採用され、同助教授を経て昭和60年に教授に昇任、合成化学教室(当時)の有機金属化学講座を担当され、平成13年に定年退官するとともに京都大学名誉教授の称号を授与されています。この講座の先代は熊田誠先生であり、熊田先生も本年6月、輝かしいご業績を残されてご逝去されたのは大変残念なことでした。心よりご冥福をお祈りします。

伊藤先生は一貫して有機合成を指向した有機金属化学=OMCOS=のご研究に取り組み、黎明期にあった有機金属化学の重要性にいち早く着目し、典型元素と遷移金属元素を巧みに利用した様々な分子変換法を発見、開発されました。伊藤先生は小田良平先生に学んだ修士時代から続けられた、イソニトリルを用いた合成反応の開拓に心血を注がれましたが、一方でケイ素を利用した合成反応の開拓にも早くから取り組み、顕著な成果を挙げておられます。遷移金属触媒を用いたイソシアニドとヒドロシランの反応が、先生のケイ素との出会いだったと推察致します。その後の σ -(シリルメチル)ベンジルアミン類を用いる σ -キノジメタン発生法開発、シリルエノールエーテルから発生させたオキサ- π -アリルパラジウム(II)中間体の化学、パラジウム(II)塩によるシリルエノールエーテルの酸化を利用した α, β -不飽和ケトン類合成法開発などのご業績は、ケイ素の特性を有機合成化学に巧みに利用した、特筆すべきものです。

先生は有機金属化学講座を担当されてから、より一層ケイ素とのつながりを強くされました。先生が研究室を立ち上げ

られてから間もおかずに、伊藤先生がお持ちであったイソニトリルの化学や有機合成化学的な指向と、講座の歴史の中で長年培われたケイ素化学とが見事に融合し、花開きました。また、初めての触媒的不斉炭素-炭素結合形成反応として知られるイソシアノカルボン酸類の金触媒アルドール反応は、伊藤先生のお持ちであった独創的なアルドール反応と、林民生先生のお持ちだった触媒的不斉合成のアイデアの比類なき融合であったといえるのではないのでしょうか。

昭和62年に、玉尾皓平先生、林先生が在籍されていた伊藤研究室に、その後有機金属化学講座の後任となる村上正浩先生が東京大学から加わり、新風が吹き込みました。筆者も同じ年に4年生として研究室に加わりましたが、伊藤先生が退官されるまで、永らくケイ素-ケイ素結合の触媒的活性化法の開拓に携わることになりました。この研究においては配位子としてイソニトリルが鍵となる働きをします。偶然の産物ながら、これも伊藤化学とケイ素化学の運命的な相性の良さを表すものと感じます。伊藤研究室にはそのころ、現在大学にて活躍する澤村正也、井上将彦、小林健二、林高史、井原栄治、河内敦、林実、山口茂弘、尾池秀章、伊藤肇、網井秀樹、桑野良一、伊丹健一郎ら諸氏が在籍し、活気に満ちていました。多くの好奇心に満ちた学生を集め、また、大学の研究者としての道を選ばせたのも、伊藤先生の楽しんで研究に取り組まれる姿と、後進を惹きつけてやまない人柄ゆえだったと感じます。

伊藤先生はその後、有機金属化合物とイソニトリルの反応により発生させるイミドイル金属種の合成化学利用に関する研究、TRAPに代表される特徴的な配位子を用いる触媒的不斉合成反応の開拓、ケイ素-ホウ素結合の活性化を鍵とする触媒反応の開拓、*o*-ジイソシアノベンゼン類の芳香族化リビング重合によるポリキノキサリンの不斉合成、炭素-炭素結合の触媒的切断反応を利用した合成反応開拓などの斯界への波及効果の大きい数々の研究を推進されました。

これらの研究成果は380編を超える査読付欧文論文に発表され、昭和44年度日本化学会進歩賞、平成3年度日本化学会学会賞、平成18年度有機合成化学協会有機合成化学特別賞を受賞されるなど、高く評価されました。

先生は京都大学を定年退官された後も、教育研究に対する熱意を持ち続けられ、平成13年4月より京都薬科大学客員教授、平成15年4月からは同志社大学客員教授として太田哲男先生とともに学生の研究指導に当たられていたところでした。

先生の飾るところのない人柄と、常に新しい化学現象を追い求める情熱にあふれた姿は忘れられません。産学に多くの研究者を輩出し、日本の有機化学、有機金属化学、および有機ケイ素化学の発展に尽くされたことに対し、心より敬意を表するとともに、先生のご冥福をお祈りします。